

「御国の盛衰、民族の死活、この一戦にあり。各員一層奮励努力せよ」

の指示を受け、水際戦では大成果をあげた日本軍だったが、米軍の圧倒的な物量の前に、徐々に押される事になる。

これまでの島では、水際で敵を抑えられない場合、後は成すすべも無くそのまま玉砕、というのが大体のパターンであった。

だが、このペリリュー島では違っていた。

高台の斜面には天然もしくは人工の洞窟が無数にあって、洞窟陣地となっている。入り口には鉄や石の扉などが取り付けられており、その扉が開くと中から砲身が突き出て来て、号音と共に火を吐く。

洞窟の近くには、60年前に日本兵士が積んだと思われる石の数々が砦の様に築かれている。この洞窟陣地はこの島に数百もあったらしい。



ごつごつとした石灰石を積み上げて作ってあった。隆起珊瑚礁のこの島では、土嚢を作ることは難しかったらしい。

かつてどこの島でも見る事がなかった軍事要塞の島を発見して、米軍は戦慄した。

「この島は甘くない...」

事実、米軍は、何倍もの兵士と何十倍もの武器弾薬を有しながら、やっとの思いで水際戦を制した後も、さらに3ヶ月弱の長期に亘って苦戦するのであった。

ジャングルの洞窟

ペリリュー島を訪れた当日に、ちょっとしたきっかけから、幸運にも私はこの島の方々と知りあいになり、第二次大戦における大激戦地の戦跡を案内してくれるという話になっていた。

同行してくれるのはクラインさんとウイスリーさん。二人とも非常にブロークンながら英語を話す。

島の中心部から車でわずかに行ったところから、いきなりジャングルへ入った。

隆起珊瑚礁の島なので、それほど高い山がある訳ではない。ただし大小の起伏が無数にある。大地は、ごつごつとした岩があると思えば、スポンジの様な落ち葉もあって実に歩きにくい。

第二次大戦時には、米軍の砲撃と爆撃で島の形が変わるほどの影響があり、木々も壊滅的な影響を受けたらしいが、現在はすっかりうっそうとしたジャングルに戻っている。

日差しは大小の木々や草に遮られてほとんど届かない。シャッターを切ると自動的にフラッシュがたかれるほどだ。

クラインさんが鉦を持ち先頭を歩く。その後をウイスリーさんが、水と酒を持ってどンドンと歩

く。

日商岩井時代に、植林可能性調査で行ったベトナムのジャングルも凄かったが、ここもなかなかだ。

つたが絡まって歩きにくい。蟻による侵蝕も凄い。前の二人が踏んだ倒れている木々を私が踏むと、何故かバキッと折れたりするのが不思議だ。枝に捕まると脆くも折れたりする。

刺のある植物も多い。

実は前の晩、一緒に飲んでいる時に、

「何なら第二次大戦の戦跡に連れて行ってあげるよ」

と言われていただけで、私は車に乗って顕彰碑や病院跡なんかを見て回るものと思っていた。

まさかいきなりジャングルに入るとは。

かろうじて靴は履いていたものの、短パンに T シャツだったのだ。皮膚が露出している部分は、ひっかいて早くも血だらけになりつつあった。

ただこの島のジャングルにはヒルや蚊、毒蛇などがいないのが救いだ。ちょっとぐらいの引っ掻き傷の方が大分マシなのだった。

パラオの人たちは、幾つかの日本語の単語を知っている事が多い。この二人も時々、

「ダイジョウブ？」

「モンダイナイ？」

「ツカレタ？」

などと気遣ってくれる。

時々、枯れ葉に隠れながら 50 センチ大の砲弾がころがっていて、

「アブナイアブナイ」

と自分で言いながら、鉈でカンカンと叩くところが怖い。



50 センチ大の砲弾。恐らく不発弾。クラインさんが、鉈で叩くのでビビりながら撮影。

彼らはとても親切でありがたいのだが、楽天的なところもあって、ジャングルに入って 10 分した頃に何気なく、

「実は迷っちゃった。もうどこか分からない」と。

そして、「コワイ?」、「シンパイナイ」というのだった。

ベトナムだったらさすがにビビっているところだが、ここは、島の大きさ自体が 15km² という小さなサイズで、一番長い直線をとっても 8 キロしかない事を知っていた。だから大怪我をしない限り、確かに全く問題がない。遠くには海の音も聞こえている。

途中、砲弾の他に、日本軍が敷設したと思われるケーブル、塹壕、水筒などを発見。また米軍が

洞窟戦に使用したガソリンの缶が多数あった。

米軍は、ペリリュー島に6000トンもの艦砲射撃を行ったらしい。加えて500キロ爆弾による雨の様な空爆を行っている。ここにある爆弾はその時のものだろう。

本日目指したところは、細長い島を南北に通っている道の脇にあるちょっとした高地である。島の南部から上陸した米軍が北部地域を攻める際に、この辺りを通らざるをえず、それを予測していた日本軍が、数々の塹壕を掘っておき、高い場所から米軍を射撃、徹底的に苦しめた、という場所らしい。

そしてその作戦によって、その後、当時既に奪われていたアメリカの制空権のもと、激しい報復の空爆にあったところだという。

これに対し日本軍は、洞窟に潜んで堪え忍び、洞窟戦へと突入するのだった。

汗だくになりながら歩く事1時間以上、ついに目の前に洞窟が現れた。

ジャングルには似たような景色ばかりなので、少し離れた場所からは全く気がつかなかったのだった。

入り口は1メートルほどの高さ。

大小の缶詰めや空缶が数十も散乱している。錆びていて、中身が何であるのかは読み取れない。その他、水筒や飯盒も幾つかある。

5メートルほど奥に進むと洞窟は左右二手に別れ、もう光が届かない。その奥は10メートルほどで行き止まる。途中にはやはり幾つかの缶詰が転がっていた。

ふと、今まですっかり忘れていた記憶が蘇る。

小学生の頃、本屋さんで初めてハードカバーの本を買った。

内容は、戦争が終わっている事を知らずに、ジャングルの中で生活する日本兵達の暮らしぶりを書いた自伝である。

500ページ以上もある本で、小学生の私にはたいへんだったが、徹夜するほど興奮し一気に読んでしまったのだった。

横井さんや小野田さんの例に見られるように、この手の話は当時たくさんあったのだろうが、このペリリュー島の話だったのではないかと思ってしまう。



洞窟の入り口。案内してくれた二人も、この洞窟は初めてと言っていた。そんな洞窟が無数にあるらしい。

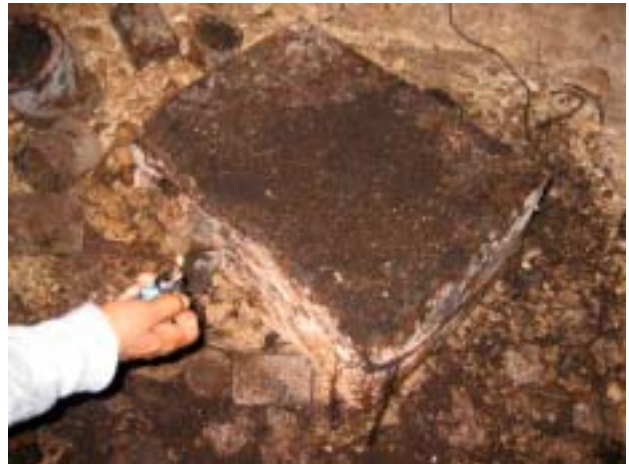


食料の缶や瓶、水筒や飯盒が生々しく点在している。ここで生活していたのが60年前というのが信じられないほど。

実際に、このペリリュー島でも、34人という日本兵士が、戦争が終わってから1年6ヶ月もの間、ジャングルで暮らしていたということだった。

洞窟の中には、遺骨らしいものはなかったが、カバンの様なものを見つけた。

米軍は、洞窟を見つけると、手榴弾を投げ込むか、ガソリンを注ぐか、火焰放射によって徹底的に焼き払ったそうなので、カバンが形を留めているという事は、この洞窟は米軍の手を逃れたものかもしれない。



ライターの火で洞窟を進むと箱の様なケースを見つけた。中に何が入っているかは不明(開けてはならない雰囲気...)

中にはきっと遺品が入っているのだろうが、何やら開けてはならない雰囲気があって、さすがに躊躇し、結局やめた。パラオ人の彼らも同じように感じたようだった。

持ってきた酒を、ころがっていた水筒に入れ、煙草に火を付け、持ってきた食料と共にお供えした。これまで多くの慰霊団が訪れたペリリュー島であるが、洞窟の数は数百で、全てを把握している人などいない。この洞窟には、慰霊団が訪れた事すらないかもしれないのだった。

散々歩いたので分からなかったのだが、実はこの洞窟、島民が使っている道路からジャングルへたった20メートル入ったに過ぎない場所にあったのだった。そんな場所でも、これまで全く人の入った形跡がなく意外である。

翌日もジャングル探検。今日の付き添いは、クラインさんとイシドロさん。

話がそれるが、この『イシドロ』と言う名前、昨夜皆で飲んでいる時に、一体何が由来か、どここの名前かを話していた。地元由来の名前ではないという。

みんなインドネシアだの、フィリピンだの、いやサモアじゃないかなどと好きな事を言って彼をからかっていたが、翌日ふと気づいた。

彼の名前の由来は、【石灯籠】なのだ。つまり日本由来なのだ。そういえばガイドブックに、『パラオには、日本神道由来の【イシドウロウ】と名づけられた人もいる』と書かれてあった。

防空壕の事を【ボーゴール】、コウモリの事を【オモイ】と彼らは時々、無茶苦茶な日本語を使っている。それと同じなのだ。まさしく彼の名前が【石灯籠】なのだった。

島の中心部に程近い場所のジャングルに入る。ここには小高い岡がある。イシドロさんは、一昨日のウィスリーさんよりも断然早くジャングルを登っていく。上半身は裸のままだ。

全くついていけないスピード。このジャングルはツタが多く、足場も悪く、かつ昨日降った雨の影響で滑りやすい。

10分ほど登ると、ちょっとした平らな部分に出る。そこに日本軍の大砲が放置されていた。長さ3メートル、直径10センチ程度の大砲である。周囲にはその砲弾が数多く転がっている。激しい銃撃戦があったらしく、砲台の弾除けには数多くの穴があいていた。



日本軍の大砲(高射砲?)。ジャングルには数多くのこうした日本軍および米軍の使用した武器が残っている。

大砲を使っていた兵士が生活していたとみられる、近くの洞窟にも入ってみる。

入り口にちょっと足を踏み入れると、ばさばさとコウモリの大軍が洞窟の外へ逃げていった。現在は、たくさんのコウモリが住んでいたのだった。

その洞窟からさらに5分ぐらい歩くと、別の洞窟がある。この辺り一帯は、珊瑚の固まりでごつごつとした岩盤がむき出しになっている。洞窟は複雑に繋がっている様である。

ある洞窟には、上手い具合に入り口がカバーされるようになっていた。これなら敵の接近と攻撃を巧みに防げる。よく見つけたなあと感心していると、一部が露出して鉄筋が見えた。どうやら、このカバーの部分は人工の様だった。なるほど都合よく出来すぎている訳だ。



洞窟の入り口に、扉の様に立ちはだかる大きな岩、とっていたら、鉄筋が入っていた。どうやら人工の扉の様だ。

しかし、珊瑚は非常に硬い。その上、このような急斜面では重機も使用できない。この陣地を作るのには膨大な時間が必要だっただろう。苦勞が何える。

今度は自転車に乗り島の北へ。

延々と自転車を走らせると、小学校の跡地があった。入り口を示す門の柱が二本、道路の脇に空しく立っている。

ペリリュー島には、現在島の中心に小学校が1つしかないが、当時は3ヶ所にあったという話をクラインさんがしてくれた。

当時は人口も多く、また日本人も多く住んでいたらしい。

戦闘が始まる前に、子供を含む民間人は、パラオ島民と共にパラオ本島に避難したのだが、こんな小学校にも米軍の爆撃があったようで、今では校舎は土台しか、また校長室だった場所には瓦礫しか残っていない。

さらに自転車を進めると、アメリカの巨大な戦車が無造作に置かれていた。いや置かれていたというよりは、放置されている。

モンゴル・ノモンハンでは、日本の戦車を圧倒するほどの大きさのソ連戦車を見たが、ここにある米軍の戦車はそれよりも大きい。このペリリュー島には、日本の戦車も無造作に置かれているのだが、米軍の戦車は、日本軍の戦車の、おそらく5倍くらいの大きさではなからうか。



旧日本軍の5倍は大きい米軍戦車。シャーマン戦車と呼ばれ、恐れられていたらしい。

そしてその奥の洞窟に、日本の大砲があった。長さは約3メートル。洞窟に足場がしっかり固定され、洞窟の外を覗んでいる。ここから打てば、水際から上陸してくるの米軍を狙えたに違いない。

しかし、すぐ側に、無傷の米軍戦車があるという事は、この大砲部隊も恐らく玉が尽きて、玉砕したと思われる。



洞窟の中に設置されていた旧日本軍の大砲。長さは3メートル近くある。

クラインさんが調達してくれたお線香に火を付け、黙とうした。クラインさんも私と同じ格好をし黙とうしてくれている。奇妙だが何だか嬉しい。

この丘からさらに山に登る。

そこには、顕彰碑と掘られた石碑があった。ペリリュー島の指揮を執っていた村井少将、中川大佐他が自決した場所だ。

その場所からは、木でできた階段が伸びている。登るとテラス状の展望台に着く。

ここは米軍が作ったというブラッディ・ノーズ・リッジ・モニュメントである。

ペリリュー島の全体や、遠くの島々を眺める事が出来る場所だ。



ブラッディ・ノーズ・リッジ・モニュメントと呼ばれる石碑。アメリカ軍がペリリュー島を見渡せる高所に設置した。

普通の観光地なら、絶景を楽しめる展望台とし

てうきうきする様な場所なのだが、その石碑は、米軍の慰霊碑になっていて、そんな気分にはならない。この場所から見える海岸では、おびただしい数の日米の兵士が死んだのだった。

この後も、日本軍の司令部や住居跡、日本の戦車などを見て回る。かなり大きな墓地があった。主として島民のお墓の数々なのだが、その一角に日本軍の兵士の墓がある。

その日本兵士の墓の横には、花が飾られている。

中川東という人のお墓だ。

この方は、奈良県で経営していた会社をたたんで10年程前にペリリュー島に移住した。

1932年、3歳のとき父母に連れられてパラオ島に移住した開拓農民の一人だったという。

若くして航空隊に志願したが、戦地に赴く前に終戦となった。

残り少ない人生を、この激戦地のペリリュー島で過ごし、遺骨収集もままならず眠っている玉砕した1万2000人の霊を弔うと共に、この地を、養子にした島の息子ジローと二人で守っていた。

中川さんは、毎年来る慰霊団の案内訳を勤めていたが、自分だけでは、あまりに多くの洞窟を発掘し慰霊するのは無理がある、と語っていたらしい。

たった数個の洞窟を2日掛かりで見た私には、その事がとてもよく理解できた。そして仮に新しい洞窟を1個所を見つけても、翌年にはもうジャングルに埋もれてしまう事だろう。

中川さんの事は、ガイドブックにも紹介されていて、私も会えるのを楽しみにしていたのだが、ペリリュー島にやって来て知ったのは、数ヶ月前の2004年1月末に亡くなったという事だった。

でもジローには会えた。小学校6年の、とてもませた子供だった。

関西弁を巧みにあやつる。日本語の会話には不自由しない様だ。

彼とは、パーティーで知り合ったのだが、妙に仲良くなって、回りが日本語を知らない事を良い事に、この島のエロい話をたくさん話してくれた。

そんな彼だったが、最近、島の人たちから『ジロー』ではなく、昔のパラオの名前で呼ばれるようになってきた、と寂しそうに語った。

つづく